

<論文>

明治初期における経済学翻訳の一齣

—漢訳書『致富新書』をめぐって—

The Significance of *Chifu Shinsho* and *Chifu Shinron Yakkai*

王 斌

Wang Bin

(愛知大学)

(Aichi University)

Abstract:

Samuel Robbins Brown's *Chifu Shinsho* 致富新書 was published in Hong Kong in 1847 and reprinted in Japan in 1871. In 1875, *Chifu Shinsho* 致富新書 was translated into Japanese as *Chifu Shinron Yakkai* 致富新論訳解 by Yu Nakajima and Itsuzou Sanui. This paper first describes the background of translation of *Chifu Shinsho* and establishes the English original. Then the paper explains the annotated version of *Chifu Shinsho* and the process and features of *Chifu Shinron Yakkai*, a Japanese translation of *Chifu Shinron*.

はじめに

幕末明治頃から、日本は西洋思想を導入することで、文化全般に大変革をもたらした。それと共に、西洋の国々から様々な分野の洋書も日本にもたらされたのである。日本初の西欧の経済学書の翻訳は、『経済小学』(1867)を挙げることができる。これはイギリスで刊行された *Outlines of Social Economy* 日本で最初の西洋経済学の翻訳である。著者は、幕末に江戸幕府の蕃書調所で翻訳係をしていた神田孝平(1830~98)である(三枝・清水編 1957:216)。『経済小学』をはじめ、こういった西洋著作の翻訳書が西洋学を修めた人々の手によって複数出版されている。

明治四年(1871)に漢訳版『致富新書』が東京で翻刻出版され、四年後、明治八年(1875)にそれに対する和訳版『致富新論訳解』が出版された。この明治四年の『致富新書』という漢訳の出版物は米国のキリスト教宣教師であるS.R.ブラウン(Samuel Robbins Brown: 1810~1880、漢名は鮑留雲)によって1847年に清・香港で出版されたものの和刻本である。この例が示すように幕末明治初期に西洋経済学を受け入れるにあたり、直接西洋から日本へという通常の流れのほか、漢訳版を通して日本へという流れもあったと思われる¹⁾。

本稿は、筆者がこれまで取り組んできた幕末・明治の経済学翻訳書・翻訳語調査から派生したものである²⁾。本稿は、漢訳版『致富新書』の成立した事情を述べると共に、その英文原本を対照

してみる。さらに、日本での翻刻版と和訳版『致富新論訳解』について両者の訳出背景を明らかにし、その特徴を述べる。

『致富新書』と『致富新論訳解』は、幕末と明治初期において日本でどのような資料が経済学の知識を得るために読まれていたかに関する手がかりを与えるものである。

1. 香港漢訳版『致富新書』

1.1 S.R. ブラウンの生涯³

S.R. ブラウンは 1810 年アメリカのコネチカット (Connecticut) 州で生まれた。彼が三歳の時、一家はエリントン (Ellington) に移り、八歳のころにはマサチューセッツ (Massachusetts) 州に移った。この頃から母と一緒に教会に出てから、マンソン・アカデミー (Manson Academy) に入学した。十八歳でアマースト大学 (Amherst College) に入学したが、経済的理由で退学、その後エール大学 (Yale University) に入学した。1832 年に大学を卒業した後、ニューヨークの聾啞学校で教えた。1835 年に教師の仕事をやめ、サウスカロライナ (South Carolina) 州に移住した。そこにあるコロンビア神学校とバアンヴィル・ヤングレディ・セミナリーで音楽を教えた。

1838 年、28 歳のころにエリザベス・バートレットと結婚して、同年に澳門へ行くモリソン号に乗り、翌年 2 月に到着し、そこで、モリソン記念学校で校長を務めた後、1841 年にテキストを作るためにシンガポールを訪れた。その際にヘボン博士夫妻に出会った。1842 年のアヘン戦争で香港が割譲されたので、11 月 1 日に校舎を香港に移転した。その後、1847 年に妻の病気のためにアメリカに帰国した。その際三人の生徒も一緒に同行した。三人ともマンソン・アカデミーに入学し、ブラウンはニューヨーク州ローマに新設されたローマ・アカデミー校の校長に就任した。校長の仕事のかたわら、1851 年より、ニューヨーク州オワスコ・アウトレット・ビーチ教会の牧師も兼ねた。1855 年にはアメリカ最初の女子大学エルマイラ・カレッジの設立にも尽力した。

1859 年 11 月に、ブラウンは改革派教会宣教師として来日した。神奈川に住み、アメリカ公使館附牧師となり、ヘボン、ゴープルとともに伝道に従事した。1861 年より、ブラウンはヘボンとともに新約聖書の翻訳を進めた。1862 年に、横浜に移った。その年、ブラウンの編纂した会話書 *Colloquial Japanese or conversational sentences and dialogues in English and Japanese*, 1862 が出版された。横浜運上所の英語教師となり、大島圭介、安藤太郎などを教えるとともに、聖書和訳にも従事した。明治維新の直前の 1867 年に一時帰国したが、二年後、新潟英語学校の教師として再び来日した。その後、1870 から 73 年まで横浜修文館の教師となり、佐藤昌介、都築馨六、小野梓などを教え、1873 年には横浜の山手にブラウン塾を開き、井深梶之助、押川方義、植村正久などを教育した。1872 年より、ブラウンは新約聖書翻訳委員および委員長として尽力したが、完成を待たずして、1879 年に病気のため帰国した。1880 年 7 月 20 日、アメリカ・マサチューセッツ州で没した。

1.2 『致富新書』の成立事情

『致富新書』は、ブラウンがモリソン学校で校長を務めた時期の著作であり、清国人の協力を得て清国語に翻訳し、1847年（道光27年）、香港で刊行されたものである。この本の目録の下側には「粵東香港飛鵝山書院蔵版」と書かれている。飛鵝山書院は即ち、香港にあるモリソン学校のことである⁴。例言の下側に「合衆国鮑留雲易編」と記されており、これは米国人の鮑留雲が編纂したものであることを表している。ここで「編」の前に「易」があることから、呉義雄（2011）は「易編」が「訳編」だと推測した（呉義雄 2011：91）。これに対して、日本の国立国会図書館などの図書館の資料説明には、ほとんど「鮑留雲易（ブラウン）編」とある。これはブラウンのことを完全に「鮑留雲易」だと思いついたものであり、明らかに不適切だと思われる。中国語では「易」と「訳」二文字の発音「YI」は同じであり、しかも『致富新書』は翻訳書であることから、「易編」から「訳編」へと推測しやすい。しかしながら、今回筆者は調査に基づいてこの「易」は「簡易」のことであり、つまり「易編」は「簡易編纂」の意味であろうと推測した。理由は二つある。一つは『致富新書』（全書56頁）に対して、英文原本はかなり厚い本（全書188頁）だということが挙げられる。もう一つは、もし「訳編」の意味で使う場合には、そのまま「訳編」を使えばいいはずである。しかも、その時代には洋書の翻訳書はまだ少なく、「訳書」のことを強調したいのであれば、当然「訳」の字を使うのが最も適切だろうと考えられる。

ブラウンの例言の中に、「中国では伝統思想を含む文章や詩の一部分を取りだして書物にまとめるのが一般的である」（中華選家、多選文章詩賦抄刻、其余各体、概置弗録。）とある。ブラウンはその状況を見て、「我が合衆国の致富新書を出版することは人々にとってたいへん有益である」（吾合衆國、選刻致富新書一本、益人良深。）として、この本の成立する経緯を次のように書いている。「中華に来てからすでに長い年月が過ぎ、これまでにいろいろな書物を閲覧した。しかし、我が合衆国の致富新書と近似の書物は滅多にない。故にあえて自ら秘せず、唐書に翻訳した。人々に重要さを知ってほしいのだ」（余到中華有年、歴覧羣書不少。而與吾國致富新書之義相同者、目所罕覩。故弗敢自秘、不辭辛苦、譯爲唐書、願人知重焉。）

『致富新書』の成立に関する情報は「例言」のほか、「序」にもある。この序文には、ある清国の文人が序を寄せている。この文人は1846年（道光二十七年）に外地から広州に来た人物であり、「序」を書くときには、すでに半年ほど滞在していた。ブラウンのことを合衆国の学識者であり、飛鵝山のモリソン学校の宣教師でもあると書いている。飛鵝山のモリソン学校の所在地は幽雅な地にあり、賢い若い子を弟子にしているとされている。地理的に前には川があり、後には山があり、いわゆる風水宝地という場所で自然を楽しみながら、香満書房で学問をしたりできるような光景である。この情報は以下のように如実に示されている。

丙年歲，余越關河而戻止，攜筆硯以來遊。五月栖留，嘆萍蹤靡定，半年寄跡，傷遊子之飄零。斯時也，外國重文人之學，他邦求識字之人，聘黃夫子而談經，請唐先生而論道。鮑留雲先生，係合眾國之肄業士，飛鵝山之傳道師也。以幽雅之地作書院，選靈秀之子為生徒。斯地也，前通大江，後連峻嶺，西爽朝來，南薰午接。間栽綠竹，或植青蕉。窗開四面，書堆十圍，鮑先生居

之、窺夜月以横經，光映琴案。對奇花而展卷，香滿書房，賞遠近之勝，樂朝夕之宜，留連翰墨，嗜好圖書。咿咿高吟，喜門徒之立志，循循善誘，賴夫子以裁成。

(句読点は筆者による)

この環境の中で、ブラウンと文人とは中華と西洋思想や文体交渉などについて、「論道」討論を行った。その時代に「天朝上国」（世界は中華を中心に存在し、周りの民族はすべて夷狄）の思想を持つこの文人はブラウンのことを称賛したのである（感嘆問字頻來、借書時至、不愧西土名儒。）。序文の最後は「アメリカ人の宣教師（S.R.ブラウン）が致富新書を中国語に翻訳した。そして、私にその修正と序文の執筆を依頼した。」（幸何爲東國賢師、摘葉抽詞祭花著論。致富番書、譯爲唐卷。全稿授我、索我俚言。）とある。ここで、「摘葉抽詞」は前述した「易編」（簡易編纂）とも一致している。

1.3 英文原本

『致富新書』の英文原本に関する指摘⁵⁾は、Casalin (2006 : 85~99)、呉義雄 (2011 : 88~96) などによって述べられてきた。呉氏は worldcat (世界図書館連合協会による図書目録) で調べた結果、その『致富新書』の著者項目に John McVicker があること (しかし著者であるかどうかは認定されていない) から、その John McVicker の *Outlines of Political Economy* (1825) が『致富新書』の原本である可能性が高いと推測した。

Casalin はオックスフォード Bodleian 図書館の所蔵本を利用した。Casalin によると、この所蔵本は英語のタイトル *Che foo sin sho* と書かれており、1876年に Joseph Edkins (1823~1905)⁶⁾ によってロンドンで発見された。また、Joseph Edkins のメモの中で “a New Work on Political Economy, by a Chinese student, educated in English at the Morrison Institution, Hongkong. It is a translation of a small work on Political Economy by Dr.Vickars, USA, I vol., Hong Kong, 1847 ” (Edkins, 1876: 37.) とあった。ここからいくつか重要な情報が手に入れられる。一つは『致富新書』の原本は Dr.Vickars (John McVicker) の経済学小本だということである。これは呉氏の推測とも合う。もう一つはこの本は香港のモリソン学校で、ある中国人の生徒が翻訳したものであることである。これは前述した「序」と「例言」に表したものと矛盾があり、おそらく『致富新書』は著者ブラウンが生徒の協力を得て完成し、さらにその文人に校正を依頼したのではないかと思われる。

はたして、John McVicker (1787~1868) の *Outlines of Political Economy* という英書はどのような本なのか、またブラウンはどの部分を訳出したのであろうか。

Outlines of Political Economy は 1825 年にニューヨークの Wilder & Campbell (Broadway) が出版したものである。表紙に「A Republication of the Article upon that Subject Contained in the Edinburgh Supplement to the Encyclopedia」と書かれている。この Article はイギリス経済学者であるジョン・ラムサイ・マックグローチ (John Ramsay McCulloch: 1789~1864) によって書かれたものである。また、表紙の真ん中には「Notes Explanatory and Critical, And A Summary Of The Science」(こ

の学問に関する解説と批判的注釈)がある。即ち、著者 John McVicker は英国の百科全書の一部を利用し、自分の経済学に対する解説や批判を論述したものであろう。

英書は 188 頁もあり、I. Definition and History (経済学の定義と学説史)、II. Production of Wealth (富の生産)、III. Distribution of Wealth (富の分配)、IV. Consumption of Wealth (富の消費)の四つのパートから成る。各パートは約 50 頁ずつある。啓蒙書である『致富新書』は簡単な内容しか入っていないため、原本のパート I (定義、学説史)を抜き、II (富の生産)、III (富の分配)、IV (富の消費)の中から抽出されたと考えるべきであろう。「自由貿易」という中心的思想は『致富新書』でもはっきりと論じられている。この点は、ブラウンが完全に McVickers から受けついだものであると言えるだろう。

翻訳書と原本との対応関係をより明らかにするために、筆者は翻訳書の目次を原本の目次と比較対照してみた。表 1 に示すとおり、John McVicker 原本と翻訳書は、ほとんど対応していることがわかる。ただし、英書の II、III、IV の部分を利用したとしても、合わせて 138 ページに上り、訳書の 56 ページとは差がありすぎる。また、訳書の中には清国文人に修正され、成語「四海之内、皆兄弟也」や漢籍『尚書』の「三年耕、而有一年之食」などの引用があるため、さらに原本と対照することができなかった。

表 1

	『致富新書』(1847)	<i>Outlines of Political Economy</i> (1825)
1	論用銀格	Exchange in commercial inter course
2	論百工交易	Appropriate to a manual of Political Economy
3	論商事	Explain the work of trader
	其二	Trading activity
4	論貿易	Commerce
5	論工藝	Devoted
6	論農工商賈	Trade
	其二	
7	論土地	Land
8	貧富分業	Charity
9	論用銀益人	Rich using wealth benefit to people
10	論物貴重	Value theory
11	論市價	Market prices
12	論平賤	Cheap convenient
13	公務	
14	学業	
15	貧約	
16	論求財	Seek for wealth
17	並處世良規	Good rules of conduct
18	論用銀	
19	並用銀例	

このように、『致富新書』の英文原本は John McVicker の *Outlines of Political Economy* に確定できたが、両書の文章の量からみると、どの部分が翻訳されたのかはつきりと判断しにくい。ブラウンは広東地方「粵東城中、文人叙会之区、商賈往來之地。近悅遠來、群賢畢至。所以天下至難得之物、亦得而有之、何其幸也」のような現地実例や漢籍、また成語などを入れたことで、『致富新書』は *Outlines of Political Economy* の訳書であるというより、むしろ英文原本からほしい部分を引き出し、書き直したものであるという方が適切ではないだろうか。

1.4 『致富新書』内容

本書は巻を分けずに一冊で 57 頁あり、全部で 18 章ある。以下に、その構成を見てみよう。

【構成】

論用銀格 / 論百工交易 / 論商事 / 論貿易 / 論工藝 / 論農工商賈 / 論土地 / 貧富
分業 / 論用銀益人 / 論物貴重 / 論市價 / 論平賤 / 公務 / 学業 / 貧約 / 論求財 / 處世良規 / 論用銀

この構成から明らかなように、原本が扱っている内容は極めて多様である。具体的には、この書物は西洋経済学の「理論」を主とするというよりはその簡潔な概念を含む内容を簡明に示すというのがその目的であった。富の生産、商品交易、商品消費、商品価格、商品価値、貿易の利点など、ほぼ当時の西洋の *Political Economy* の主な内容を含んでいる。

第一章「論用銀格」は、主に「善於施濟、哀孤恤寡、敬老憐貧、此用銀之善法」（鮑 1871：本文一丁裏）という貨幣の効用を論じたものである。次いで、「論百工交易」は社会の分業や各職に勉むこと「各務一芸、則精於一芸、故器多有所成、而民亦多有所用」（鮑 1871：本文四丁表）などを述べた。「論商事」と「論農工商賈」は本書の中心となり、内容も多いため、この二章については「其一」「其二」に分けてある。ブラウンは当時清国社会の「土農工商」という元来の身分制度に対して、農と商が平等であるという思想を指摘した。「論商事」に「然既有利、則富其人、並富其国矣」（鮑 1871：本文六丁裏）の通りに商事は社会にとって不可欠なことである。

このように、本書は著者が「自由貿易」という主旨を提唱し、それは全書に涉っている。ちなみに、本書は文言（文語文）を用いている点で白話（口語文）を用いる現代風の翻訳とは大きく異なる。

2. 日本翻刻本『致富新書』

明治四年（1871）に、早くも訓点をつけた漢文が日本で刊行された。明治初期の人たちはこの文言スタイルで著したものを、漢文訓読で馴染んだ読法で日本文として読んだのである。返り点に従い、単字・熟字を和語で、あるいは日本漢字音で、時には外来語を交えて読み下した。そして、経済学の概略を知るとともに、そこに使用されている熟字・単字の漢語を、原文を翻訳することなく理解することができた。

『致富新書』翻刻本は東京篠笈軒より出版され、翻刻者平田宗敬による「翻刻致富新書序」にはその経緯が記されている。

致富全書行於世既久矣、其為書難未必無所裨益、而頗涉煩瑣迂迴、於經濟之理似不的由此編合衆國人所撰述、其論尤的確允當、所主在勤儉之人人可能知可能行、至於通商貿易、則最致意、要之無復迂回煩瑣之弊、實可謂得嘗今經濟之要者矣、凡讀此書者、能得其理、則施之於家於國於天下、無適而不可、雖然運用之妙、蓋存於其人、所謂人能弘道、非道弘人也、頃者書肆文苑閣欲翻刻之、請余校正、但原來係于謄寫、不免牡丹無千歲之誤、別無善本可據、疑以存疑、誤以傳誤、姑仍舊貫、不敢妄付鄙見、將俟他日得善本再校之讀者亮之

明治壬申維暮之春

平田宗敬撰

(句読点は筆者による)

ここでは、本書は他の経済学書に比較しても「必ずしも役立たないもの」（未必無所裨益）であり、むしろ「最も達意で且つ当今において経済の要諦を得ている」（最致意、得当今經濟之要）など優れている点が指摘されている。また、翻刻者平田が使った原本は「謄寫」本であり、当時流通していた活字本は利用しておらず、誤りが生じることを避けるために「謄寫」本のままで翻刻作業を進めたことが伺える。

翻刻版は上下二巻からなっている。それぞれちょうど「謄寫」本の半分の量に分け、「貧富分業」までは上巻となり、それ以降の内容は「下巻」となっている。中身を通覧すると、空白の□がいくつかあるようで、それはほとんどキリスト教関連の言葉、例えば「耶蘇、救世主」などであるが、これは当時まだキリシタン禁制であったためであろうと考えられる⁷。

翻刻本『致富新書』は当時どれほど読まれたかは不明であるが、現在各大学の図書館で保存されている点数から見て、版を重ねたことはまちがいない⁸。また、この翻刻本以降に、「致富」が書名などに使われることが多い点からも、本書の影響力が見てとれる⁹。さらに、孫建軍の研究によると、当時、海軍省明治五（1872）年の記録から、名作『自由之理』と並んで、「必用之書籍」と認められていたようであり、公的機関で読まれていたことが指摘されている（孫建軍 2014：312）。

なお、翻刻者・平田宗敬は漢学者である。その生没年や事績については現在のところ不明である。明治初期という英学へ転換する時代に多くの翻訳書の校正を手掛けることに力を尽くし、例えば『万国通史』（明治六、七年）、『仏国学制』（明治六～九年）、『百科全書経済論』（明治七年）などで彼の名が確認できる。また、明治五年に作られた漢学者が集まる旧雨社の部員であり、漢学活動も行われていたことは確かであろう¹⁰。

3. 和訳版『致富新論訳解』

『致富新論訳解』は『致富新書』の日本語訳であり、明治八（1875）年に、漢学者・中島雄（1853～1910）と讃井逸三（未詳）が共訳で完成させたものである。中島はもと幕臣であり、維新後に静岡学問所でまなび、のち上京し中村正直（1832～1891）のもとで「同人社文学雑誌」の編集長を勤める。明治十一（1878）年から清・北京公使館に務め、明治三十六（1903）年一等書記官となり、五十八歳で没した。讃井逸三は殆ど知られていないのであるが、国立国会図書館にて調べたところ、本書以外にもいくつかの本を著している¹⁴。例えば、『米英仏独魯墺蘭国勢袖鑑』（1872）、『密都爾氏 地理書直訳』（1872）、『道德保安条例：一名・真理法海航路之指針』（1888）などがある。このように、漢学者から英学者に転向した中島・讃井の両氏は明治期、とくにその初期に活躍した人物だったのであろうと考えられる。

いうまでもなく、明治初期においては入門啓蒙翻訳書の出版が盛んであり、本書は『経済小学』（1867）、『官版経済原論』（1869）、『生産道案内』（1870）などの次に出されたものである。本書は東京の文苑閣より出版された。その序文には中村正直が四葉分の序を寄せている。

西国之書籍具在。彼之經濟之術。所以致富之道。苟就其書而求之。則不帝以金針度示人矣。頃者。中島雄讃井逸三二兄。原於合衆国人鮑氏之說。旁引曲証。遂成此書。属餘序。余常当慨于我邦今日之景況工事不盛。而邦民不富焉。故喜其刻竣。而叙以是言。

以上のように、中村は「経済之術」のような西国書籍が世の需要に求められていることを嘆いて、より「邦民」を豊かにするために、合衆国人鮑氏の「致富之道」という西洋理念を含むこの書が和訳されたと書いている。その担当者が中島雄と讃井逸三であり、二人とも序文を書いた中村の生徒ということからも、恐らく中村が二人に翻訳作業を依頼したものであろうと推測できよう（孫建軍 2014 : 313）。

『致富新論訳解』は翻刻本の上下巻の二冊に対して、和訳は上中下巻の三冊からなり、さらに分量が多くなっている。さて、香港版の原本、翻刻本、和訳本の三者の目次を対照してみよう。

表 2 が示しているように、十九章からなる香港版の最後の二章「論用銀」「並用銀例」が、翻刻書では「論用銀」として一つに括られている。そして、香港版の「並處世良規」章が翻刻版の最後に調整されている。和訳書の方はそのまま翻刻本の内容順に従って訳された。和訳本は翻刻本を三等分にして完成している。上述の目次以外に、和訳本『致富新論訳解』は訳者の「例言」にも「毎篇訳者ノ言ヲ附録スル」とあるように、「訳者曰く…」というコメントが付されている。しかも、これらのコメントは例言にも「全ク我輩自己ノ臆説ニ出ルに非ズ概ネ^{ワイルド}空^{ギリシ}蘭徳氏義里士氏ヲ首トシテ西国先哲ノ議論ヲ纂輯」とあり、先行者の理論をまとめて載せているということが伺える。

また、三巻の和訳を通覧してみると、本書の訳文には、多くの振り仮名が付されている。これは一つの特徴とも言える。

表2

目次内容比較		
『致富新書』漢 訳 (1847 香港)	『致富新書』漢訳翻刻 (東京篠筵軒) (1871 日本)	『致富新論訳解』和訳 (東京 松柏堂) (1875 日本)
	上巻	上編
論用銀格	論用銀格	金銀ヲ用フル道ヲ論ス
論百工交易	論百工交易	百工ノ交易スルヲ論ス
論商事	論商事	商事ヲ論ス
其二	其二	其二
論貿易	論貿易	貿易ヲ論ス
論工藝	論工藝	工藝ヲ論ス
		中編
論農工商賈	論農工商賈	農工商賈ヲ論ス
其二	其二	其二
論土地	論土地	土地ヲ論ス
貧富分業	貧富分業	貧富ノ分業ヲ論ス
	下巻	
論用銀益人	論用銀益人	銀ヲ用ヒ人ニ益スルヲ論ス
論物貴重	論物貴重	物ノ貴重ヲ論ス
		下編
論市價	論市價	市價ヲ論ス
論平賤	論平賤	平賤ヲ論ス
公務	公務	公務
学業	学業	学業
貧約	貧約	貧約
論求財	論求財	財ヲ求ムルヲ論ス
並處世良規		
論用銀	論用銀	用銀ヲ論ス
並用銀例		
	處世良規列左	世ニ處スル良規左に列ス

全三巻に収められている付訓の総数は表3のようになる。表から明らかなように、章ごとに、内容、頁数それらの例文に付された振り仮名の数も大きく異なっている。漢語の振り仮名は基本的に、二種類に分けられる。一つは、直訳（原本の漢単語と一致する方法）につけられたルビである。もう一つは、和語で意識を振るルビである。振り仮名の詳細については、紙幅に制限があるため、別稿とする。

また、漢語の振り仮名以外に、本書に使われている漢語自体に注目しておきたい。一般的には、漢訳文から和文へ訳す際に、いくつかの方法がみられる。

表3

	章	総頁数	付訓箇所	右訓	左訓	両訓
巻上	金銀ヲ用フル道ヲ論ス	5	106	96	0	10

	百工ノ交易スルヲ論ス	8	93	82	1	10
	商事ヲ論ス	12	146	136	1	9
	貿易ヲ論ス	7	44	41	0	3
	工藝ヲ論ス	7	63	56	0	7
卷中	農工商賈ヲ論ス	14	128	121	1	6
	土地ヲ論ス	7	58	54	1	3
	貧富ノ分業ヲ論ス	7	60	55	0	5
	銀ヲ用ヒ人ニ益スルヲ論ス	10	116	107	0	9
	物ノ貴重ヲ論ス	9	93	88	0	5
卷下	市價ヲ論ス	8	98	94	0	4
	平賤ヲ論ス	7	101	94	1	6
	公務	10	117	108	0	9
	學業	9	74	69	0	5
	貧約	9	75	73	1	1
	財ヲ求ムル論ス	5	32	28	1	3
	用銀ヲ論ス	4	25	22	1	2
	世に處スル良規左に列ス	2	11	10	1	0

一つは、日中に共通している漢字語の直訳（そのまま使用）。もう一つは、和語（日本語の漢語語彙を含め）に転換して訳す。本書の場合、その「例言三則」に「翻訳ノ主意ハ原書ノ旨義ヲ失ハザルヲ要トス故ニ此書ヲ訳スル寧ロ拘泥ニ失スルトモ敢テ浮泛ノ語ヲ用ヒズ讀者ノヲ諒セヨ」と述べられているように、前者の漢文の漢字語をそのまま利用した。より原文を忠実に和訳する方法を取り入れたため、基本的に直訳でそのまま元の漢語を使用して訳した。このように、和訳するとき、そのまま馴染みやすい漢字なら、そもそも日本語ではないものでも、ルビを振って訳した。一方、当時経済学の書に用いられている言葉だと、そのまま原本にある「漢字語」を使用せずに本来の漢語を用いることになる。たとえば、「貨本」（原）→「財本」（訳）、「費用」（原）→「諸入費」（訳）、「貨利」（原）→「財利」（訳）がある。これは中日言語文化交流の一面を示すものであり、近代翻訳語の形成の解明のために重要であると考えられることから、詳しい訳語比較研究を進めるべきであろう。

もう一つ訳書の漢語について指摘すべき点がある。それは、前述した「訳者曰く」の中に出てくる言葉である。訳者のコメントの用語がどこから出たかについて、訳者の「例言三則」に「毎篇譯者ノ言ヲ附録スルモ全ク我輩自己ノ臆説ニ出ルニ非ズ概ネ^{カイルランド}空蘭徳氏^{イリス}義里士氏ヲ首トシテ西國先哲ノ議論ヲ纂緝シ經濟致富ノ道ニ於テ相發明シ易カラシメン^{カイルランド}ヲ期スル訳者ノ婆心ナリ苟モ童蒙此等ノ書ヨリ發軔シ、^{イリス}潜心刻苦メ他日^{イリス}空義諸氏ノ原書ニ就キ其本義ヲ得ルニ至ラバ訳者ノ厚望コレニ過ギズ」とあるように、訳者は「西國先哲」である「^{カイルランド}空蘭徳氏、^{イリス}義里士氏」の議論（訳書）

から翻訳語を受け継いだことが分かる。例えば、以下のように原本に出てこない経済に関連する漢語がある。

財本（モトデ）、^{コウサイ}交際（ツキアイ）、^{フクシ}福祉（サイハイ）、^{コンケン}自主自立、^{セウヒ}根元、^{ツイヤシ}消費（ツイヤシ）、^{キヤウキウ}供給（ソナエル）、^{モクシ}出産、^{キョウジ}蓄積、^{チヨウキ}貯蓄、^{シヤウ}市場、^{シヤウ}消磨、^{シヤウ}賣買スル、^{キンギン}金銀幣、^{ウンソウ}運送スル、^{カウ}交易[スル]、^{フダギン}紙幣、^{カハセテガタ}為替手形、^{モノ}物品、^{シヤウ}生産スル、^{コウギョウ}工業、^{ブツシツ}物質、^{シヤウ}職業、^{シヤウ}製造スル、^{ケンゾウ}建造スル、^{ブン}分課スル、^{ナリハセ}分業、^{ナリハセ}生産ノ力、^{ユウツウ}融通、^{イリヨウ}需用、^{イリヨウ}産出スル、^{カウ}價、^リ利、^{モノ}産物、^{ハイブン}配分スル、^{モノ}品物、^{モノ}産スル、^{シヤウケン}商權、^{シヤウ}市場、^{ゴシヤウ}互市場、^{シヤウ}通商、^{シヤウ}貿易、^{シヤウ}賣買自由ノ權、^{シヤウ}自由ノ權、^{リウツウカウカン}流通交換、^{モノ}物産、^{リキ}利益、^{リキ}利銀、^{シヤウ}勤勞スル、^{シヤウ}所得、^{モノ}財貨、^{モノ}物價、^{ハタラク}活機、^{ハタラク}所望、^{モノ}功用、^{モノ}制品、^{モノ}産業、^{モノ}勞作（ホネオリ）、^{モノ}家産、^{モノ}私有、^{モノ}權利、^{モノ}私有ノ分界、^{モノ}分界權利、^{モノ}資材、^{モノ}所有ノ權利、^{モノ}私有物、^{モノ}消費スル、^{モノ}經濟、^{モノ}自由ノ産、^{モノ}金錢、^{モノ}本價、^{モノ}市價、^{モノ}公共物、^{モノ}私有品、^{モノ}代金、^{モノ}製造場、^{モノ}交換取與（トリカヘヤトリ）、^{モノ}取與スル、^{モノ}自主自由ノ職業公權、^{モノ}俸祿費用、^{モノ}納稅、^{モノ}租稅、^{モノ}資本、^{モノ}本業、^{モノ}運漕、^{モノ}私利、^{モノ}財、^{モノ}貨幣通用金、^{モノ}經濟致富ノ学、^{モノ}會社

（漢字の上の振り仮名は右訓、括弧内は左訓）

この中には、現在でも通用する言葉もあれば、使わなくなった言葉、所謂消滅した語もある。さらに、一般用語にも、学士、法律師、法律士、醫者、發明、^{モノ}電機、^{モノ}訴訟、^{モノ}裁斷、^{モノ}研究、^{モノ}健康、^{モノ}幸福、^{モノ}政府、^{モノ}生命、^{モノ}誤謬（アヤマリ）、^{モノ}飲食、^{モノ}福祉（サイハセ）、^{モノ}儉節、^{モノ}司配人、^{モノ}教育などが出ている。本書の出版された明治八年の時点では、かなり経済学に対する翻訳の心得をもつこと、またその語彙の豊富さ及び適切さから、すでに現代のものに近かったと思われる。「開化」、「通義」などの時代に著しい言葉はすでに流行っていた。臆断ではあるが、それは福沢諭吉の作品¹²の影響だったのではないだろうか。これらの漢語から見て、明治初期はまさに漢語の氾濫時代であったといえよう¹³。

4. おわりに

隣国の清がアヘン戦争に敗北した直後に、中国人により刊行された地誌書『海国図誌』、『瀛寰志略』は、その時代の警世の意を込めた本である。それに対して、本書『致富新書』は『博物新編』や『万国公法』などの漢訳洋書と同じように、S.R.ブラウンのような宣教師や清人助手により漢訳されたものである。これらの漢訳洋書は日本でも翻刻され、そして和訳本へと日本で広まっており、知識として共用されていったに違いない。因みに、当時、共用されている翻刻本の和訳は決して一つだけではない。例えば、『致富新書』に関しては、漢学者・藤田容齋（維正）氏が訳した『致富新書訳義』（写自筆）などもある¹⁴。ただし、この書は出版されたかどうかは不明である。

一方、日本の開国後、日清で活躍する宣教師たちが増えたとはいえ、日清両国に滞在し教育に携わった人物はほとんどいない。S.R.ブラウンは例外的な人物である。また、『致富新書』は簡易な経済学を紹介する啓蒙書であるが、恐らくこれが西洋経済学を中国に紹介した最初の本なので

はないだろうか。当然のことながら、翻訳の面からみると、その和訳書『致富新論訳解』は、「例言三則」の「翻訳ノ主意ハ原書ノ旨義ヲ失ハザルヲ要トス故ニ此書ヲ訳スル寧ロ拘泥ニ失ストモ敢テ浮泛ノ語ヲ用ヒズ讀者之ヲ諒セヨ」とあるように、直訳の方法が使われた。そのためか、訳者によるコメント「訳者曰く」の部分に出ている経済学用語（漢語）は殆ど原文に現れない。これらの漢語の出典はさらに調査し追究する必要があると考える。ともあれ、日中経済学用語の交流は本書からスタートしたといえよう。

最後に、S.R.ブラウンに関して、宣教の面や日本語会話書、聖書がよく研究されたことはいまでもないが、彼が八年間も滞在していた香港での前期教育活動についての研究はまだ不十分であると思われる。しかも、日本で活躍していた期間が二十年間もあつたにもかかわらず、その著作『致富新書』はあまり注目されていないようである。少なくとも、今の段階では、日本において『致富新書』について彼が直接触れた形跡は、管見の限り見られない。今後、これについても検証されることを願いたい。

.....

【付記】

本稿は、2014 年度愛知大学研究奨励金による研究成果の一部である。本稿を書くにあたり、国立国会図書館近代デジタルライブラリー、愛知大学図書館の蔵書を利用させていただいた。文学研究科早川勇教授のご指導をいただいた。また、宮崎裕明先生から論文の日本語修正及び、千賀新三郎氏から貴重なコメントや有益なご助言をくださった。記して、感謝にかえたい。

.....

【著者紹介】

王 斌 (WANG Bin) 愛知大学大学院文学研究科(欧米文化研究室)研究員。専門は英和辞書史、近代東アジアの言語文化論、日本英学史の研究に従事。最近の論文に「明治初期の西洋経済学書の導入」『英学史研究』第 48 号(2015)ほか多数。

.....

【註】

- 1) 近代日本における漢訳書籍の輸入・和刻に関して、八耳俊文「清末期西人著訳科学関係中国書および和刻本所在目録」『化学史研究』第 22 卷第 4 号(1995 年)が詳しい。例えば、地理方面では、『海国図誌』(1842 年)と『瀛環志略』(1848 年)が有名である。医学方面では、『博物新編』という書は幕末期から明治期にかけ、藩学・小学校・郷校の教科書として使われていた。ほかに、天文学、物理、化学などあらゆる分野も含まれていると言えよう。本書『致富新書』もその流れの中の一つであり、日本人が当時漢訳版を通して、間接的に西洋学の知識を摂取したと思われる。
- 2) 筆者はこれまで日本の明治初期に出版された西洋経済学書とその翻訳語について原書と翻訳書の言語を対照し、「経済用語の訳語変遷」のスキームを作成している。

- 3) S・R・ブラウンの経歴に関しては、(高谷道夫編訳『S.R.ブラウン書簡集』、日本基督教団出版部、1965年;『岩波西洋人名辞典 増補版』岩波書店、1981年、p1212;『キリスト教大事典 改訂新版』、教文館、1968年、p918)を参照。
- 4) 当時、その地方は灣泊山丘が多く、飛鵝がよくそこで棲息していた。それ故、その山は「飛鵝山」と呼ばれていた。学校の名前も「飛鵝山書院」と名付けられた。現在、宣教師馬禮遜 (Robert Morrison) を記念するために、モリソン学校の所在地の飛鵝山を灣仔摩理臣山 (Morrison Hill) と呼んでいる。
- 5) 挙げられた例のほか、大崎恵治「札幌農学校初期の経済学書」(『北海道大学農経論叢』第32号、1976年) pp.85~104も若干触れていた。この論文は明治13年に開始された札幌農学校の初期の経済学書について書かれたものである。その中で、本稿の S.R.ブラウン (Brown) が、American Political Economy (1870) の著者であるボウエンの間違ひではないのかと言う点についても論じている。その結果、『致富新書』の出版年は1847年で、1870年よりかなり前であり、American Political Economy が英文原本ではないことが明らかにされた。
- 6) 英国の宣教師・東洋学者。ロンドン伝道教会から派遣され、北京・上海で布教した。著「中国口語文法」など。
- 7) 二年後の明治六年(1873)にキリシタン禁制の高札が撤去されることになる。
- 8) 国立国会図書館で「致富新書」を調べると、この本の所蔵図書館には大阪市立大学 学術情報総合センター、関西大学 図書館、九州大学 附属図書館、京都大学 経済学部 図書室、滋賀大学 附属図書館、一橋大学 附属図書館、北海道大学 附属図書館、三重短期大学 附属図書館、鹿児島県立図書館、茨城県立図書館、国立国会図書館などがある。
- 9) 近代デジタルライブラリーで「致富」を検索すると、例えば、『中西聞見録』「論英国致富之術」(1875)、『致富の要訣』(1879)、『西稗雜纂』「致富不祥」(1876)、『致富小記』(1881)など多数ある。
- 10) 曰く、旧雨社。これは全く前二社と其組織を異にし、文人詩客たると、経学家・史学者たるとを問はず、苟も漢文学を修めし人々が互の親睦を計らんとて、毎月一回長 = (西+它) 亭に会するものたり。重野成斎翁の計画に成り、島田篁村・三島中洲・岡松甕谷・南摩羽峯・星野豊城・鱸松塘・村山拙軒等の諸氏を初とし、麗澤文社の諸氏皆出席するとぞ。麗澤文社は之れが支流なりと云ふ。(『早稲田文学』第四号「時文評論」明治二十五年)
- 11) 国立国会図書館の近代デジタルライブラリーを利用した。 <http://kindai.ndl.go.jp/>
- 12) 当時、福沢の著作『西洋事情』には「通義」(Freedom, Liberty の訳語) などの造語が多数出ている。
- 13) 明治初期における漢語の氾濫については、すでに山田孝雄(「近代日本語と漢語語彙」『金田一博士古希記念言語民俗論叢』三省堂(1953)所収)、池上禎造(「漢語流行の一時期」『国語国文』(26巻、6号)1957年)、森岡健二(「明治初期の漢語」『文学』(30巻、11号、1962年)、松村明(「明治以後の日本語」『現代国語学Ⅲ』筑摩書房、1958年)など、先学によって述べられているところである。
- 14) 金沢図書館所蔵。以下のサイトを参照されたい。
<http://www.lib.kanazawa.ishikawa.jp/kinsei/093ragetsukutsu.htm>
 漢学者である藤田容齋は西周、福沢と同様に私塾を開いた。恐らく、彼自身の訳した『致富新書訳義』が塾生の間で講読されたのではないかと想像される。

【参考文献】

- ブラオン原著、中島雄・讃井逸三訳(1875)『致富新論訳解』松柏堂(家蔵)
- 合衆国鮑留雲易編(1872)『致富新書』箴於軒蔵(家蔵)
- 呉義雄(2011)「鮑留雲興『致富新書』」中山大學學報(社会科学版)第51卷
- 堀 經夫(1991)『増訂版 明治經濟思想史』日本經濟評論社
- 鮑留雲易編(1847)『致富新書』粵東飛鷺山書院蔵板(家蔵)
- 『岩波西洋人名辞典 増補版』(p1212)岩波書店(1968)
- 『キリスト教大事典 改訂新版』(p918)教文館
- 大崎恵治(1976)「札幌農学校初期の經濟學書」(pp.85~104)『北海道大學農經論叢』第32号
- 三枝博音・清水幾太郎(編)(1957)『日本哲学思想全書』第十八卷、平凡社(1981)
- 孫建軍(2014)「三つの『致富新書』とその周辺—S・R・ブラウンの明六社での講演の経緯も探って—」
『東アジアにおける近代知の空間の形成』、東方書店、pp.305~328
- 杉山忠平(1991)『明治啓蒙期の經濟思想 福沢諭吉を中心に』法政大學出版局
- 高谷道夫編訳(1965)『S.R.ブラウン書簡集』、日本基督教団出版部
- Federica, Casalin(2006),Some Preliminary Remarks On The ZhifuXinshu, (pp.85~99)『或問』11号
- McVickar, John(1966)Outlines of political economy,New York : A.M. Kelley